カミバロー
平成25年3月31日
第２４４号
清野新聞社

感動の甲子園（修）

昨年末、東京での遠軽高校同期忘年会において、２１世紀枠が決まれば、皆で甲子園に応援に行こうということになっていました。

３月２３日（土）朝一番の第一試合なので、奈良の兄宅に前泊し早朝一緒に出かけました。

私の年次は幹事が入場券、応援グッズを用意して待っていてくれました。北海道からのメンバーは色とりどりの祭り半被を自前で用意し、声援にも力が入ります。

試合は８時半開始、前半は投手戦でチャンスがありながら、なかなか点数が入りませんでしたが、後半一気に３点が入った時には、１千人の応援席は大歓声で皆総立ちでした。

エースピッチャーの前田君は湧別の漁師の息子、漁の手伝いで鍛えた立派な体格で完封しました。試合はなんと戦後の最短記録を更新し午前１０時前に終了しました。せっかく遠くから来たのにと後ろ髪を引かれながらアルプススタンドを出ました。

さっそく皆で祝勝会をやろうと話がまとまり、賑やかに移動開始。そろいの応援ジャンパー・帽子を着たままで電車に乗ったので地元の子供から「あっエンガルだ、テレビでみてた。おめでとう！」との声に思わず「ありがとう！」と握手、日本中が遠軽を応援してくれた心境でした。これも勝ったからできることです。誰が見ても明らかに祝勝会に向かうという笑顔満面の我々一行をみて。「私たちも仲間に入れていただけないか」とお婆ちゃん達のグループが話しかけてきました。聞いてみると堀前知事と同級生とのこと。われわれは気分も最高、この際は年齢など問わず一緒に大阪梅田まで行って祝勝会をやろうということになりました。考えてみれば我々も還暦過ぎの爺さんでした。

昼前から飲み始めたので、夕方まではかなり時間があり、京都在住の同級生を誘おうと何故か京都駅まで移動して梯子酒です。結局新幹線東京行きの最終に近くなるまで騒いでしまいました。臨時のクラス会のようなもので、こんなにも楽しく素晴らしい感動の場をつくってくれた後輩に感謝感謝！！

北海道新聞

「満振り魂」大舞台で

遠軽高 甲子園初勝利

全力プレー爽やか

春夏通じて最北の甲子園出場校、遠軽高（オホーツク管内遠軽町）が23日、第85回選抜高校野球大会1回戦（甲子園球場）でいわき海星高（福島）に3－0で快勝した。選手は随所にチームの持ち味「全力プレー」で、初出場での甲子園初勝利を手にした。決勝打を放った柳橋倖輝主将（17）は「普段から意識してきたことができた」と胸を張った。（21面参照）

遠軽はグラウンドが雪に閉ざされる冬期間に打力を磨く工夫を重ね、夏の甲子園出場を争う北海道大会決勝に4度進出するなど安定した成績が評価され、21世紀枠での初出場を果たした。

3月上旬、道東を襲った暴風雪では同管内湧別町から通うエースの前田知輝選手（17）を身近なチームが甲子園で勝つのは励みになる」。道高野連北見支部長の東谷一彦・北見柏陽高校長（57）は「歴史的な勝利。支部として地道な強化活動を積み重ねてきたことが実を結んだ」と喜んだ。

遠軽高の佐藤貴之監督（41）は試合前、選手に「見た人に『いい試合だった』と言ってもらえる試合をしよう。それが21世紀枠の役割」と呼び掛けた。

攻守交代の全力疾走とテンポのよい守りは六回の集中打を生んだ。試合時間は選抜大会史上最短記録にあと1分と迫る1時間16分。遠軽球児のはつらつとした動きは約1万人の甲子園の観客に爽やかな印象を残した。

はじめ遠軽町外から通う部員が帰宅できなかった。それでもナインは「雪をハンディとは思っていない」と口をそろえる。

守備よりも打ち勝つ野球を掲げ、ゴルフのフルスイングから名付けられた「満振り打線」。食事やトレーニングで筋肉量を増やし、農業用ハウスで打撃練習に励むことで鍛えた。

対戦相手のいわき海星高が東日本大震災で被災し、グラウンドを満足に使えない困難と戦っていることも、「地域的なハンディを言い訳にできない」（柳橋主将）との思いを強くした。

オホーツク管内勢では、春夏通じて7度目

試合開始のあいさつ後、全力疾走で守備位置に向かう遠軽高ナイン（伊丹恒撮影）

私にとっての遠軽（修）

昨年６月のクラス会をきっかけに、東京での忘年会、甲子園応援など思いもかけず突然に高校時代の付き合いが復活したことから、あらためて遠軽を思い出し考えてみた。

遠軽は母親の出身地であり、子供のころから実家へ遊びに行くのが楽しみだった。湧別町の上芭露に比べて当時の遠軽町は大都会だった。映画館、商店街などが華やかで、お祭りでもないのにいつもたくさんの人が歩いている賑やかな街であった。札幌や東京も遠軽をちょっと大きくしたくらいにしか考えていなかった。

今回遠軽高校が甲子園２１世紀枠の推薦理由が「最北の過疎の町で、厳しい自然環境を乗り越えてきた」と言われると、私としてはかなり複雑な心境である。確かに統計データでの人口減少は否定しようはないが、もうひとつ私の心の中の複雑なものに気がついた。

私は賑やかなことが好きで、小中学校、大学、職場、現在も友人仲間など、人生のほとんどを通じて同世代の付き合いではいつも幹事役など中心的な立場にいる。

唯一高校だけが例外で、同窓会ですら卒業後一度も出席したことがなかった。転勤族で名簿では行方不明者になっていたのかもしれないが、今にして考えてみると他に様々な事情があった。

当時の**遠軽高校は都会のマンモス校**で上芭露中学出身ではまさしく山岳少数民族の山猿のような存在だった。「１５の春」に生まれて初めて自己紹介なるものを経験し、人生のギャップとしては、札幌や東京へ出ていった際よりはるかに大きなものがあった。

加えて村の事情もあった。我が故郷「上芭露」は**薄荷生産が壊滅**して離農が相次ぎ、過疎のために高校２年生の時に**中学校が廃校**になった。冷害もあり村全体が重苦しい時代だった。また兄が大学進学で家を出て行き、人手が減ったギャップを埋めるため学校が終われば真っすぐオートバイで自宅に帰って農作業を手伝った。これは肉体的には大変だったが、家の役に立っているというやり甲斐があった。むしろ村が大変な時に私だけ高校でノンビリと勉強していていいのだろうかと引け目を感じていた。受験に失敗した時、猛吹雪の窓外を一人で凝めながら、予備校にはいかず自己管理で半農半学の自宅浪人をしようと決意した。

ただ、夏休みなどで兄が帰省した時は嬉しかったが、帰っていった後に取り残された寂しさを考えると最初から帰ってこないほうがいいと思ったこともある。しかし、両親は子供が皆出ていってしまってからは、その何倍もの寂しさに耐えて生きてきたのだと思う。別れは出ていく者には希望に満ちているが、残された者には寂しいものだ。私もその後、親には申し訳ないと思いながら大学進学で家を離れた。

以来、故郷を出てから全国を転勤し、時には世界中を駆け回って様々な困難な事態にも直面してきたが、そんな高校時代の経験が、どんな状況でも乗り越えられる自信を育ててくれた気がする。

現在日本一の繁華街、東京の銀座に通勤しているが、遠軽は私にとっては今もなお、そんな人生の街であり、銀座に負けず、かけがいのない記憶に残る大都会なのだ。

たまたま昨年還暦記念クラス会の案内があり、高校卒業以来４２年ぶりで初めて出席した。年末には東京で忘年会をやり、多くの親友とも再会して朝帰りするまで楽しく飲み騒いだ。そして、今回皆で甲子園に行き、一緒に後輩を応援しながら、湧き上がる感慨に涙を抑えられなかった。祝勝会では大騒ぎで祝杯を重ねながら、高校時代の私の思いなどもつぶやいたところ、田舎出身で同じような思いの者もいた。同窓会では離農で出て行った側の者もいた。私は両親が故郷に健在で恵まれた方だった。そんな時代・地域だったのだ。

平成２４年度は、私の青春時代のこだわりを４０数年振りに払拭してくれた記念すべき年となった。

遠高正門：S24.6

関東忘年会:S24.12 日本橋

甲子園ｱﾙﾌﾟｽｽﾀﾝﾄﾞ